

平成30年5月14日(月)

老球の細道412号

トステインクリニック雑感 〈コーチの学び〉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

5月4日(金)5日5日(土)と葵高校においてトステイン・ロイブル氏による「指導者講習会」が開催された。U-16のアジア選手権大会を先月終了し、その後オーストラリアでFIBAのコーチインストラクター講習会を経て多忙の中、今年もまた会津地区に来てくれた。実に17年間18回目のクリニックで、日本で一番の回数である。

これだけ続けているのだが、残念ながら会津地区にいながらトステイン氏のクリニックを一度も受けたことがないコーチ、選手がたくさんいる。今回参加した指導者はのべ50人くらいだが、半分近くは県内他地区、県外(神奈川)のコーチであった。選手も連休中で練習試合に勤しんでいるチームがほとんどで、日程の調整がうまくいかなかった。

「良いコーチの三つの“好き” ①バスケットボールが好き②選手が好き③学びが好き」

今回のクリニックのテーマは主に4つ。①U-19ワールドカップ(映像)から世界のバスケットボールトレンド②ファンダメンタルの指導理論③ペースアップゲーム(速攻からアーリーオフense)④日本のジュニアナショナルチームのディフェンスコンセプト

今回のクリニックで特に参考になったのは「ペースアップゲーム」をするための速攻からアーリーオフenseに繋げる戦術の「ティーチング」と「コーチング」であった。ペースアップゲームとは、動きを止めない、ボールを止めないで攻め続ける方法で、相手の能力やサイズを凌駕する方法だと私は解釈した。

PART LEARNING(段階的指導法・・・A A+B A+B+C A+B+C+D)というティーチングテクニックを使い、アーリーオフenseに入ってからピック&ロールをエントリープレイにしてからの戦術的要素を段階的に負荷をかけて指導していく。ドライブからのオフボールマンのスペーシング、ヘルプサイドのフレアスクリーン、キックアウトからのエキストラパスとNBAながらのチームプレイを指導してくれた。

わがチームは弱いからそこまでは無理だ、必要ないなどと指導者の声が聞こえそうだったが、選手たちの能力は指導者の見方でははかり知れない。自分の選手を決めつけてはいけな。今できなくとも、いつか必要になる時が来るかもしれない。現在のレベルが二流、三流でも、目指すは超一流。世界のトレンドなどは知っておいて損はない。指導者は、愛するチーム、選手たちに最高のものに触れさせる努力が必要なのではないだろうか。

昨年朝日新聞のインタビューでトステイン氏は次のようなコメントを述べていた。

【指導者育成では、一度にすべてを教えようとせず、段階を踏んで指導することの大切さを伝え、定着させたい。日本はミニバスケットボールが全国に普及していて、規律と野心があり、熱心に努力する子どもたちがたくさんいる。米国や私の母国とドイツと比べても、日本ほどたくさんの才能豊かな子どもたちを見つけられる国はないと思う。日本はバスケット界の“眠れる巨人”だ。コーディネーショントレーニングや指導者育成という道具を使って、なんとかして巨人を目覚めさせたい】

コーチはチームの“眠れる巨人”を目覚めさせるために常に学ばなければならない。コーチの学びの能力が選手の能力である。元仏サッカー代表監督ロジェ・ルメールは言う。

「コーチは学ぶことをやめたとき、教えることをやめなければならない」